

論文の要旨

宮内庁書陵部蔵『春秋経伝集解』
鎌倉期点による日本漢音の研究

目 次

1. 研究目的	1
2. 研究資料および方法	1
3. 仮名音注分析	2
4. 反切・同音字注分析	2
5. 反切上字分析	4
6. 反切下字分析	5
7. 声点分析	6
8. 結論	7

広島大学大学院 教育学研究科 博士課程後期
文化教育開発専攻 国語文化教育学分野

申智娟

1. 研究目的

日本漢字音研究は周知の通り、呉音と漢音とを大きな軸として、数多くの研究が行われてきた。日本漢字音の複層的な性格によって、互いに違う層位の字音研究が主な流れと言える。現在に至るまで、数多くの研究が成されてきて、多くの成果も得ている。が、まだ発掘されない資料とそれによる研究は課題として残っている。

佐々木勇(2007)は、漢音の場合、残存資料が多い点、これを通じて伝承漢音を規範から指摘しやすい点などを挙げて、呉音や唐音などと比較する際に、応用可能であることを強調している。結局、漢音研究は日本漢字音史において、共時的・通時的な漢字音の多様な実体を捉える上で、最適であると言えよう。

このような脈絡から、本研究においても漢音に焦点を置いて研究の方向を設定した。漢字音研究は漢籍訓点資料と字音直読資料を広く選択して、分析することが理想である。が、様々な限界があるため、豊富な加点を保有する一つの資料を選び、それを整理・比較することが有効な方法であろう。本研究では、こういった観点から『春秋経伝集解』の写本のうち、宮内庁書陵部蔵『春秋経伝集解』文永五年点(1268)(以下、文永点と略称する)を資料として選択して漢音の実状を調べることにした。

本研究は、文永点に加点されている全漢字音注を詳細に分析して具体的に明らかにし、本資料の日本語史的な位置(漢字音資料としての位置)を確定することに、その目的がある。

2. 研究資料および方法

宮内庁書陵部蔵『春秋経伝集解』文永五年点(1268)全30巻は、杜預が註釈を付けた『春秋左氏経伝集解』に、清原家博士により加点された漢籍訓読資料である¹⁾。文永点はその奥書により、保延五年(1139)清原頼業の加点本を清原直隆と清原俊隆が移点したものと知られている。

本資料には、仮名音注、反切・同音字注、声点の漢字音注が加点されている。いずれも多数加点されているため、日本漢字音史および鎌倉時代の漢字音を研究する上で、重要な資料である。

文永点の音注が反映する字音を漏れなく把握するためには、文永点の音注を体系的に分類して一覧することが有効であろう。まず、『広韻』により知られた中国中古音の体系によって、文永点の仮名音注を分類して分韻表に配置する。この分韻表を基に、「仮名音注」「反切上字」「反切下字」「声点」など四つの項目に分け、文永点の加点様相を考察し、異例的な用例および混用様相を中心に解釈を試みる²⁾。

1) 研究資料は、宮内庁書陵部蔵原本の広島大学蔵カラー写真による。

2) ただし、同音字注は仮名音注や反切を分析する上で、必要な場合に限って述べる。

3. 仮名音注分析

「仮名音注分析」では、仮名音注に現われる異例的な表記に着目し、各摂韻別に分けて検討を行った³⁾。その結果、本資料の仮名音注が表わす体系は、基本的に日本漢音と一致した。幾つの特徴を纏めると、以下のようになる。

1) 本資料の仮名音注には、誤記・誤読および異例がかなり少なめである。沼本克明(1982:663)により、経書の依據資料が『經典釈文』であることが既に明らかになっている。よって、経書である『春秋経伝集解』も『經典釈文』という確実な依據資料を持って、清原家累代の訓読法を基に規範的に加点したと考えられる。また、経書という特性上、より正確な音を加点しようと工夫したため、異例的な仮名音注が少ないものと考えられる。

2) 魚韻開口3等乙類は、原則的に日本漢音でㄩ形と拗音形表記されるが、歯音2等字では「ソ」と直音形になる例が多い。歯音2等字では、呉音のように「ソ」と読む習慣が残っていたと推定される。呉音では「ソ」であったが、漢音では乙類の甲類への合流を反映して、「シヨ」と変わったためである。即ち、魚韻開口3等乙類歯音2等字は「ソ」と呉音読される字が多かったため、反切を書いて「シヨ」と正しく読めるように校訂したものと考えられる。

3) 『春秋』は紀元前5世紀、孔子から始まり、「春秋三伝」と『杜預集解』を経て本資料に至っている。よって、「伯ハ」「汰タツ」「税タイ」など、日本漢字音では一般的ではない音や用法が散見される。

4) 止摂合口字の場合、牙喉音字以外にも「イ/ヰ」両表記が混在されている。「スヰ」「ツヰ」「ルヰ」などは、中国原音の介音wを表記しようと工夫した痕跡と見られ、一部の学識者の間で行なわれたものと判断される。

5) 諄韻合口甲類の場合は混記が多い韻であり、院政期・鎌倉時代に入ってから体系的に整備され始めた。しかし、本資料では大抵、合口表記されている。このような表記は、原音の合口性を忠実に表記しようと工夫した表記法上の初期的段階での混記である。が、本資料は鎌倉中期点であるため、前代底本の移点によって形として残ったものと解釈すべきである。

4. 反切・同音字注分析

沼本克明(1982:663)により、経書と史書の訓読にはその依據資料に大きな差があり、経書の依據資料は『經典釈文』という単一書であり、史書は複数書を依據資料としていることが指摘されてきた。これによると、経書である『春秋経伝集解』も『經典釈文』から反切・同音字注を引用していると推定される。

しかし、具体的にどの『經典釈文』を依據資料としているかについて、まだ明らかでは

3) 本研究では、中古漢語体系の伝統的な分類の代り、各摂の韻尾体系によって分類し、分析を行った。李京哲(2006:195)による分類。

ない。したがって、「反切・同音字注分析」においては、現在確認できる範囲で、最も古い版本である北京図書館蔵宋刻宋元遞修本『經典釈文』⁴⁾(以下、宋版本と略稱する)を比較資料として、文永点の反切・同音字注と比較した。これを通じて、文永点が行研究の通り、『經典釈文』のみを反切・同音字注の依據資料としているか否かが確認できると考えられる。文永点と宋版本の反切・同音字注を比較した結果は、以下のようになる。

1) 文永点に「反切」「同音字注」「声点」「仮名音注」のうち、一つだけでも加点されている字は21,376例であり、そのうち、反切・同音字注が加点されている字は12,819例である⁵⁾。

2) 文永点と宋版本の反切・同音字注を比較した結果、卷によって一致率に差はあるものの、全部90%を上回っている。最高一致率は97.97%(⑫卷)であり、平均一致率は約95%に至る。高い一致を示していることから、経書が『經典釈文』を反切・同音字注の依據資料と扱っている既存の論議を、再確認できた。

3) しかし、反切・同音字注が加点されている12,819例のうち、約1.09%に該当する140例に文永点独自の反切・同音字注がある⁶⁾。

4) 上記の140例のうち、『經典釈文』以外の出典が示されているものは、16例である。このように、文永点には小數ではあるものの、『經典釈文』以外の資料からも反切・同音字注を引用していることが確認された。

5) 出典が示されている16例を除いた124例の多くが、文永点で使用されたことのない反切・同音字注である。このことから、加点者がある字に反切や同音字注が要ると判断して、他資料から引用した可能性、または加点者の音韻意識によって加点された可能性などを推定できる⁷⁾。

6) なお、宋版本(および『經典釈文彙校』)には反切や同音字注があるが、文永点に加点されていない用例も多い。このことから、必ずしも『經典釈文』をそのまま引用したものではなく、加点者の判断によって選択的に引用したと推定できる。

要するに、文永点の反切・同音字注の依據資料が、必ずしも宋版本とは言い切れない。しかし、文永点と宋版本における反切・同音字注の比較作業を通じて、先行研究のように、経書が依據資料で『經典釈文』という単一書のみを扱っているわけではないことが明らかになった。

4) 『經典釈文』の全版本と比較することがより正確な分析になると思われるが、様々な通行本全部を比較することは物理的に難しさがある。

5) 各数字は、延べ字数である。

6) 「文永点独自の反切・同音字注」とは、文永点と宋版本を比較した結果、宋版本には存しない反切・同音字注が文永点には有る場合を示す。

7) これと反対に、出典は示されていないが、文永点で既に使用された反切・同音字注もある。こうした場合は、いずれも該当字のすぐ近くに同じ反切・同音字注が加点されていた。それと同じ反切・同音字注をそのまま引用した可能性が大きい。

5. 反切上字分析

「反切上字分析」では、反切上字のみを研究対象として、牙音・喉音・舌音・唇音・齒音に大別して分析を行った。検討の結果を音別に簡単に纏めると、以下のようになる。①「文永点と宋版本の反切上字が異なる用例」②「文永点独自の反切」に対する解釈を示す。

[牙喉音] ①牙喉音における「文永点と宋版本の反切上字が異なる用例」は38例である。それを調べた結果、文永点と宋版本のどちらも被切字と反切上字の声類が異なる用例があり、文永点より宋版本の一致率が高い。見母-溪母、溪母-匣母、群母-見母などの混用が現われ、牙音内や喉音内の混用および牙喉音間の混用現象があったことが分かった。

②牙喉音における「文永点独自の反切」は19例であり、『切韻』『玉篇』『宗韻』『服虔』から引用した反切もあった。そのうち、『宋韻』引用の反切にのみ、于母-影母の混用が1例現われるだけで、その他、全て被切字と反切上字の声類が一致している。

[舌音] ①舌音における「文永点と宋版本の反切上字が異なる用例」は22例である。文永点には透母-定母、定母-透母などの混用、宋版本には端母-定母、定母-澄母の混用が見られ、宋版本の声類一致率が高い。宋版本と同様に文永点の反切にも、清音と濁音および舌頭音と舌上音の混用例が存するが、その用例数が極めて少ないため、比較的舌音系の声類が安定していたと考えられる。

②「文永点独自の反切」の場合、牙喉音と同様に舌音でも被切字と反切上字の声類が全部一致している。舌音は南北朝期に既に舌頭音と舌上音とに分化し始め、二つが混用される例が散見される。しかし、「文永点独自の反切」では舌頭音と舌上音が明確に反切されていることから、『經典釈文』以外の韻書などを参照して加点(校訂)した可能性を示唆していると言えよう。

[唇音] ①唇音における「文永点と宋版本の反切上字が異なる用例」は24例である。宋版本に幫母-滂母、滂母-幫母の混用が現われ、文永点には幫母-滂母、滂母-幫母などの混用が現われている。

②唇音における「文永点独自の反切」は15例である。いずれも被切字と反切上字の声類が一致しており、牙喉舌音と同じ振る舞いを見せる。

[齒音] ①齒音における「文永点と宋版本の反切上字が異なる用例」は22例である。宋版本の反切上字はいずれも被切字と声類が一致する反面、文永点の反切には從母-邪母、從母-澄母、初母-山母などの混用が見られる。孤例ではあるが、從・邪母が互切された例もあり、その他、齒頭音と正齒音内の混用が見られる。

②齒音における「文永点独自の反切」は21例である。「文永点独自の反切」は字例数が少ないため、明確な傾向性を導き出しにくいだが、精母-從母、照母-禪母、穿母-精母、審母

-心母、神母-禪母の混用が、それぞれ1回ずつ出現している。

[まとめ] 「文永点と宋版本の反切上字が異なる用例」と「文永点独自の反切」を比較した結果を、表に示す⁸⁾。

五音	文永点と宋版本の反切上字が異なる用例		文永点独自の反切
	文永点	宋版本	
牙喉音	13/37	4/32	1/19
舌音	6/22	3/18	0/14
唇音	5/23	2/20	0/15
齒音	7/22	0/15	4/21

1) 「文永点と宋版本の反切上字が異なる用例」を『經典釈文彙校』の反切と比較した結果、ほぼ宋版本の反切と一致していた。このような結果のみで、文永点反切の依據資料が宋版本ではなく他版本であったと確定できるかと言えば疑問は残るが、一つの可能性として考慮すべきである。

2) 「文永点独自の反切」の場合、喉音で『宋韻』引用の反切で混用が1例現われ、齒音では若干の混用が見られるのみで、大部分、被切字と反切上字の声類が一致している。これは、「文永点と宋版本の反切上字が異なる用例」に現われた様相とは確然と違う。これらのことから、出典が示されていない「文永点独自の反切」について、加点者が『經典釈文』以外の韻書を参照して加点(校訂)した可能性を想定できる。清字と次清字および清濁の混用は重要な音韻的特徴であるため、これを校訂せずには混用が現われないことはないだろう。

3) 「文永点独自の反切」の場合、既に多用されている反切をそのまま加点したと考えられる用例もあれば、『広韻』反切と一致する例が多かった。これは、文永点を加点する当時の韻書を参照した可能性を意味するものであろう。

6. 反切下字分析

「反切下字分析」では、各摂の韻尾体系によって分類し、各摂ごとに現われる異例や混用様相を中心に詳細に検討を行った。ただし、関連性の高い摂に限って、二摂を一緒にまとめた。

各韻に使われた反切下字を整理し、相通例や混用様相などをより具体的に調べた。既存の『經典釈文』に関する研究において、単純に「相通」と解釈・処理されている部分について、具体的な原因や証拠などを提示しようとした。中古音では説明できない用例に限って、上古音からの影響を考慮し、その証拠を示した。また、本資料の用例から判断した、南北朝期の字音の特徴などを指摘することができた。

紙面の制約により、各摂における具体的な分析内容は省くこととする。ここでは、筆者が

8) 数字は全体用例に現われる混用数を示す。ただし、被切字や反切上字が誤記と判明された場合は、除外した。

各摂において、注目した問題点のみを示す。

[果摂] 戈韻合口1等の反切下字として、開口の歌韻1等字(多・何・可・賀・我・佐・河)が多用されている点に注目した。

[仮摂] 麻韻開口2等字「賈」に反切下字として、佳韻開口2等字「買」が使われていることに注目した。

[遇摂・流摂] 本資料から見た「模韻化」と「侯韻化」の速度に着目した。

[效摂] 多音字である「暴」「躡」などの使い分けに着目した。

[蟹摂] 蟹摂における混用(相通)様相がどのように反映されているのかに着目した。

[止摂] 止摂内における各小韻の混用様相を考察することに着目した。

[陽声韻] 王力の上古音29部分類によると、東・冬・鍾・庚・耕・清・青・登韻の字が上古時代から発音上、極めて密接な関係を持っていたことが分かる。このように、陽声韻は上古時代から深い関連があるため、互いに頻繁に混用された。したがって、陽声韻では各摂に現われる混用様相に注目した。

以上のように、「反切下字分析」では、今までの研究とは違う角度から接近し、『經典釈文』が成立する当時の字音体系をより細かく分析しようとした。本研究の目的が『經典釈文』を分析することにあるわけではないが、漢字音注の多くを占めている反切を考察することは、何より重要な作業であると考えられる。

7. 声点分析

本資料の声点は、平声・入声において軽・重を区別し、平重・平軽・上・去・入重・入軽という6声調体系を成している。文永点については、保延点をほぼ正確に移点し、その上に、仮名を付加した点本であり、声点についても、加点位置・声点が示す声調とも、大部分一致していると指摘されてきている⁹⁾。さらに、佐々木勇(2009:988)によれば、文永点の第十卷全体の声点を整理した結果、全濁上声字は上声加点例の方が多いとされている。

このように、『春秋』の声点における全濁上声字は、上声加点例の方が多いとされている。しかし、佐々木勇の調査は、全三十巻のうち、ごく一部の調査に留まっているため、文永点全声点における傾向とは言えない。

筆者の調査によると、文永点における全濁上声字は、上声加点例91例、去声加点例151例となっており、去声加点例の方が遥かに多い。巻によって、去声化の比率にばらつきがあるのは当然のことであり、各巻における全濁上声字の数は少ないため、全声点を対象として分析しなければならない。全声点を分類した結果から、全濁上声字の去声化がかなり進んでいたことが分かった。一方、平声と入声の軽重の区別は、相当早くから曖昧になっており、時代が降るにつれてこの区別の混同が増加し、鎌倉時代末期には、平声軽は平声重に、入声軽は入声重になった¹⁰⁾。文永点における平声の清字では、平声軽は67例にすぎ

9) 佐々木勇(2009:988) 参照。

10) 沼本克明(1986:268-269) 参照。

ず、平声重は782例である。また、次清字では、平声軽は23例に留まっているが、平声重は178例である。このような現象は、入声でも同様である。入声の清・次清・清濁字では、入声軽より入声重の加点例の方が遥かに多い。

以上の結果から、文永点は保延点を移点した資料ではあるものの、声点においては、加点した当時の傾向を反映していると言えるであろう。これについては、既に変化した声点を反映した可能性、あるいは加筆者が変化を意識して声点を付した可能性を想定できる。どちらにせよ、これは校訂の概念であって、漢音化が定着または完成していく段階を表しているものと考えられる。

8. 結論

本資料における漢字音注は、「仮名音注」「反切」「声点」において、それぞれ違う様相を呈しているといえよう。このような現象の原因として、「表記の保守性」を挙げられる。

表記の保守性から言えば、「反切」が一番保守性の高い音注であり、その次が「仮名音注」である。そのため、反切では保延五年点と同様に、『經典釈文』から反切・同音字注を殆んど引用している。『經典釈文』以外の韻書からも反切を引用しているが、その数は少ない。仮名音注も前代底本の影響を受けて、規範的に加点したため、異例的な音注は少ない。

一方、保守性の低い「声点」では、先行研究とは正反対に、全濁上声の去声化がかなり進んでいることが明らかになった。なお、平声・入声における軽声の消滅も顕著に現われている。これは、加点者の音韻意識が働いたことを意味するものであろう。鎌倉時代に入って既に変化した声点を反映したものか、それとも、変化しつつある声点を意識して付したものか、判断は付かないが、加点者の音韻意識が反映されているといえよう。